

したりなど、目に見える対応をしていただきました。

近年増加しているフィリピン系児童生徒への対応については、学部内でも特に研究していただきました。さらに、外国人の移動は、茨城県や群馬県との間では特に多く、北関東というエリアでのこの3年間の研究から、私の現場にとっても役立つ内容がいくつかありました。

HANDSの発足より前に、宇都宮大学国際学部主催のシンポジウムに参加した際、市民の方から、忘れられない意見が2つ挙げられました。一つは、ODAの一部を国内ODAとし、日本国内在住の外国人支援に使うべきだという意見でした。本当にそうならば、多くの課題がかなり解決されると思います。ぜひ、政治家の方々に考えて欲しいと思います。

もう一つの意見が、大学の発表・提案は良いのだが、大学の研究と実際の外国人の方々の生活や学習への支援との間には、時間の面においてかなり意識のずれがあるというものでした。大学は研究なので、実際にいま困っている人々には、研究成果が生かされないという意見でした。そういった声を生かしてのことか、その後、HANDSが発足し、大学が地域を直接支援する仕組みが整い、現在に至っています。もちろん、国全体での大学の地域貢献ということもあったと思いますが、シンポジウムで吸い上げられた声も生かされたのではないかと思います。

HANDSには、本当にお世話になってきたのはもちろんですが、情報の受け手にとどまるのではなく、分担する・作る・発信するという関わりもさせていただきました。そう考えると、私もHANDSの一員と言っていいのかも知れません。たくさんついている手に自分の手を繋ぐことで有機化合物となって私達を結びつけるもの、それがHANDSではないでしょうか。



子ども国際理解サマースクール

